

池谷和信（編）『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』

■ 出版地：京都 ■ 出版社：昭和堂 ■ 出版年：2020年 ■ 総頁数：336頁 ■ 定価：2800円＋税

宮脇 千絵*

本書は、ビーズとは何かという問いに、文化人類学、考古学、保存科学、史学を専門とする18名の執筆者が答える論集である。特にビーズと人との文化的、社会的な関わりに焦点が当てられる。

編者は、国立民族学博物館共同研究会『世界のビーズをめぐる人類学的研究』（2016年10月～2018年3月）の代表を務め、それを基に国立民族学博物館特別展示『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』（2017年3月～6月）を実施している。展示用図録も出版され、世界各地のビーズの豊富なカラー写真と、29名の執筆者によるコラムが掲載されている（池谷（編）2017）。これら共同研究会、展示とその図録の成果をさらに拡張させたのが本書である。図録と本書は、ビーズとは何かという大きな問いを共有しているが、本書ではさらに、ビーズに着目しホモ・サピエンス史を構築すること、そして人類にとっての美の起源を探ること（p. ii）という具体的な目的が掲げられている。

30万年前にアフリカで誕生し、10万年前にアフリカ大陸の外へ移動し始めたホモ・サピエンスに注目し、その地球全体への拡散と、ビーズ使用を関係づけながら、ビーズからみたホモ・サピエンス史を描く本書は、序章と時代で区切りをつけた4部構成になっている。それでは早速、内容をみていこう。

序章「人類とビーズ」（池谷和信）では、本書の問題意識と目的が示される。今から7万年前の旧石器時代、脳に突然変異、すなわち認知革命が起こったことによって、ホモ・サピエンスは眼前に存在しないものを想像したり、それを他者に伝承したりする能力を得たという（p. 2）。ビーズは、認知革命より3万年早い約10万年前の遺跡から出土している。そのため、ビー

ズに着目することで、ホモ・サピエンスが美という観念を持ち得た起源や理由に迫ることができる（p. 2）と説明される。これにより本書では、10万年前から現在までを考察の対象とするのである。

ビーズは「素材に穴をあけて紐でつなげたもの」と定義され（p. 6）、本書では穴のあいた物質そのもの、それが紐状のもので連ねられた状態の総称としても使用される。また、それが布や革に縫いつけられたり、別の素材の表面に貼られたり、はたまた仏像の装具として象られたりといった、ビーズによる細工も取り上げられる。ビーズの特徴のひとつとして、単体使用よりも、それが数多くまとまった状態での使用が圧倒的に選好されてきたことが挙げられる。ひとつの装身具のなかに、素材、色、形、製作技法、来歴の異なるビーズが混在すること、そこに我々は多様な魅力を感じるのかもしれない。

「I. ビーズの誕生とその展開」では、ビーズが、いつ、どこで、どのような素材を使って、どのような理由で生み出されたのか（p. 16）が、4つの論考から示される。

第1章「人類最古のビーズ利用とホモ・サピエンス——世界各地の発見から」（門脇誠二）では、考古資料から、人類社会におけるビーズの発生と定着が論じられる。最古級のビーズは、貝殻やダチョウの卵殻であると考えられ、12万年前ごろに遡る。7～10万年前になるとアフリカでビーズ発生が顕著になり、4万5千年前以降にヨーロッパやアジア各地などにも広がった。ビーズには10万年前ごろの発生期と、その後の定着期があることが示される。さらにホモ・サピエンスは、ビーズを個人的な利用に留めたネアンデル

* 南山大学

タール人とは異なり、それを集団間で交換するなど、社会ネットワークの形成に利用したと指摘される。

第2章「新石器時代のストーンビーズ——狩猟採集・初期農耕時代の東アジア」(河村好光)では、ホモ・サピエンスが定着生活を営み始めた新石器時代の東アジアに焦点が当てられる。この時代は、貝、石、牙や骨、草木などがビーズの素材となった。そのうち石(ストーンアクセサリー)は、8千年前から7千年前にかけて出現する。石をビーズとするには、研磨と穿孔が必要となる。筆者は、一見原始的だとも思われるストーンアクセサリーが、しかしその比較的単純な技術で製作されるからこそ、ともに身につけ、ともに飾るという、横につながる身体装飾の体系に結びついたとする。

第3章「縄文時代の装身具——多様な素材と翡翠ビーズ」(山本直人)では、縄文時代のビーズ使用の変化と発展が述べられる。日本では、後期旧石器時代の石製ビーズが最古とされ、縄文時代創成期にはビーズは発見されていない。早期になると貝類、動物の骨歯製ビーズが出土し、その後前期にかけて軟質の石の使用がみられる。中期には、翡翠や琥珀など硬質の石がみられる。後期には焼成粘土製がみられるようになる。ここでは翡翠に着目し、その産地が限定されていたことにより、貴重品や宝石として交易されたことが指摘される。そして、装身具としてのビーズには、さまざまな社会的な意味が付されるようになったのだとされる。

第4章「先史琉球の貝ビーズ文化——豊かな素材と素朴な文化」(木下尚子)では、考古資料に基づき、先史琉球人の貝ビーズの製作方法、貝の種類による分類、その分布が詳述される。そして、種子島広田遺跡のある南東部圏以外の南東中部圏、南東南部圏ではなぜビーズ文化が継続的に発展しなかったのかと問う。筆者は、貝ビーズの素材が豊富ではなかった地域で広田人が中部圏という遠方の素材に付加価値を見出した可能性と、逆に素材が豊かな地域では、そこの付加価値をつける意識が生まれにくいという、「豊かさゆえの素朴な展開」があったのではないかと結論づける。

続く「II. 古代国家と古代文明の形成・展開」の5つの論考は、人類が最初の都市や国家をつくりあげた古代文明において、ビーズがどのような役割を果たしたのか(p. 16)を論じる。

第5章「古代日本とユーラシア——ガラスビーズか

らみる交易」(田村朋美)は、人類が初めて作った人工材料とされるガラスに着目する。日本列島では、弥生時代以降にガラス製品が流通するようになった。装身具としてのガラスビーズの作り方は様々であるが、筆者は化学組成から生産地とその交易ルートを探る。その結果、弥生時代の日本には、東南アジアや南アジア、西アジアや中央アジア、そして地中海周辺地域からガラスビーズがもたらされていたことが明らかになる。しかし7世紀後半、日本列島でガラス生産が開始されると、輸入ガラスビーズは衰退し、奈良時代になるとビーズの用途は人ではなく仏を飾るものへと変化したと説明される。

第6章「インダス文明のカーネリアン・ロード——古代西南アジアの交易ネットワーク」(遠藤仁)では、インダス文明におけるビーズの種類、代表的なカーネリアン(準貴石)によるビーズの製作方法、そして交易を俯瞰しながら、文明圏内外に、ビーズだけでなく、その素材や加工技術なども伝播したことが明らかにされる。この文明を支えた広範囲に及ぶ交易ネットワーク、特に筆者が「カーネリアン・ロード」と呼ぶ交易ルートによって、石が持つ魅力のみならずビーズの加工技術が、中央アジアや地中海世界、アフリカにまで拡散していったことが示される。しかしインダス文明が衰退すると、ビーズの広範囲での組織的な交易も廃れていったという。

第7章「弥生・古墳時代の多様なビーズ——社会の複雑化と装飾」(谷澤亜里)によると、弥生時代後期前半から中頃にかけて石製ビーズの生産が減少し、舶載のガラスビーズの普及が増えたという。それに伴いビーズは、装身具や装飾品、副葬品から、社会的地位の顕在化の役割を付すようになった。舶載のガラスビーズは、遠隔地や列島外との接続の保有を示す威信と成り得たのである。この時期、舶載ビーズは日本列島のビーズ文化を支えたのだが、その装飾の嗜好は大陸とは異なっており、当時の列島社会の美の意識をうかがい知ることができる。

第8章「古代エジプトの社会をつなぐビーズ——王と家臣、神と人」(山花京子)では、古代エジプトにおいて、ビーズネックレスがファラオからの「贈物」として家臣へと下賜されたことから、中央集権社会を構築するための重要な鍵となっていたことが示される。また興味深いのが、材料が身近に入手できたため多くつくられたファイアンス(ガラスと陶器の中間物質、焼結石英)の青緑色が、再生・豊饒の意味を帯

び、神とのむすびつきを示す祭祀用にも使用されたことである。古代エジプトにおいてビーズは、神と人をつなぐ役割も担っていたのである。

第9章「中国文明の宗教芸術にみるビーズ——敦煌莫高窟の菩薩装身具」(末森薫)は、北涼から隋・初唐の時代に莫高窟にあらわれた菩薩装身具として、どのようにビーズがあらわされているのか、その変遷を明らかにする。仏教芸術では、建築の部材や服飾、装身具などにビーズ装飾の造形が用いられるのだという。そこには、仏教の普及の程度、時代ごとの服制の影響、東西からの情報の流入が反映されている。本稿で示されるのは、人の身体を飾るという役割を超えた、宗教芸術における使用というビーズ利用の多様性である。

「Ⅲ. 大航海時代と世界システム」の4つの論考は、大航海時代に世界をつなげたガラスビーズ、および独自のビーズ文化が展開されたオセアニアの貝殻文化に着目する(p. 17)。

第10章「アフリカに渡ったガラスビーズ——ビーズ文化を受容した社会、しなかった社会」(戸田美佳子)によると、アフリカ諸国では15～18世紀に、交易品としてヴェネチア製やオランダ製のガラスビーズが持ち込まれ、普及した。カメルーン北西部高地の首長制社会では、これらが王の力や富を象徴するものとして代々受け継がれた。一方、南東部の狩猟採集民や北部の牧畜民は、身近な自然素材を用いて厄除けや装身具としてビーズを使用してきた。本稿では、外部社会との接触・交渉によるビーズ文化のあり方や変化が一様ではないことを示し、ビーズがあるところとないところの差が何かという問いが投げかけられる。

第11章「アイヌと北方先住民を結ぶガラスビーズ——交易の歴史と文化的役割」(大塚和義)は、商品経済の大きな発展がみられる13世紀以降、アイヌの人々がどのようにガラスビーズを入手してきたのかを、考古学的発掘資料や民族資料を基にたどる。当時、ガラスビーズの生産技術は欧米列強や中国に限定されており、アイヌはそれを受容する側だった。しかしアイヌは、それを威信財としたり、女性の正装に欠かせないものとしたり、新たな工芸を生んだり、自らの社会や文化に取り込んでいった。列強諸国と先住民世界とのあいだの時に不均衡な交易の歴史は、アイヌがビーズの美しさに魅了されていった過程でもある。

第12章「オセアニアのガラスビーズがきた道——

航海誌・考古学・民族資料からたどる」(印東道子)では、貝や石製ビーズが使われてきたオセアニアにおけるガラスビーズの受容の地域差が述べられる。ミクロネシア西部の島々では、ヨーロッパとの接触以前に東南アジアからガラスビーズがもたらされ、財として価値づけられた。一方で18世紀にヨーロッパと接触して初めてガラスビーズを受け取ったポリネシア地域では、その価値は高まらなかった。その理由の考察を通し、本稿は、もしビーズが誰でも入手できるものではなく稀少性が高められていたら、もしサイズや色が彼らの嗜好に合っていたなら、ポリネシアにおけるビーズ文化は異なっていたかもしれないと結ばれる。

第13章「オセアニアの貝ビーズ文化——欧米化のなかの婚資と地域通貨」(後藤明)では、メラネシアの貝ビーズの製作方法、生産システムが詳述され、ひとつの貝貨や装身具が完成するまでに、贈与、交換、購入という仕組みがあることが明らかにされる。また有名なクラ交易の装身具に使用される貝の採取、加工、製作、贈与とその社会的位置づけが紹介される。本稿では、貝ビーズの製作、流通、消費の過程にはさまざまな人が関わり、またその過程で変化もすることが示される。

最後の「Ⅳ. 地域文化の持続と変容——ビーズからみた現代世界」の各論考は、現代のビーズ利用を扱い、地域文化の持続と変容の実態を明らかにする(p. 18)。

第14章「東アフリカ牧畜社会の若者文化——ビーズにみる社会と文化の変容」(中村香子)で紹介される東アフリカの牧畜民サンプル社会には、19世紀終わりから20世紀初頭にかけてチェコ製のガラスビーズがもたらされ、それまで真鍮製だった首飾りは、短期間でビーズへと移り変わった。華やかなガラスビーズは、民族間のアイデンティティを表示するとともに、男女ともにライフステージを表示するものとして利用された。そして現在、学校教育の導入や観光業への参加によって、その使用や意味が変化してきている。本稿では、人々がビーズの取り外し可能な特徴とその美しさとうまくつきあっていることが示される。

第15章「台湾原住民族の文化の多様性——ビーズにみる過去と現在」(野林厚志)では、台湾の原住民族の人々が、動物、植物、プラスチック、石や金属など多様な素材をビーズとしてきたことが示される。そして彼らの自然素材の使用法や、交易を通じた外部社会との交流が明らかにされる。さらに、子どもが身に

つける護符、財としての意味づけ、社会階層の明示や音を響かせることで意味を伝達する役割といったビーズの社会的機能が紹介される。最後に、パイワン族のビーズが時代を経て、奢侈品から、安価で誰でも所有できるもの、原住民族文化の象徴へと移り変わり、現在では伝統を受け継ぎながらビーズ製作に従事する若者が出てきていることが紹介される。ビーズには、彼らの想像力と創造力が発揮され続けるのだと締めくくられる。

第16章「現代アイヌのタマサイ——文化のシンボルとしてのビーズ」(齋藤玲子)ではタマサイと呼ばれるアイヌの首飾りが、近代から現代にかけて着用されなくなっていった状況について文化人類学の視点から考察される。タマサイは主にガラスを連ねたもので、女性によって受け継がれ、盛装時に身につけられてきた。ただ現金との交換などで手放す人が増え、現在ではあまり受け継がれていない。しかしながらアイヌ文化の伝承活動に従事する女性のなかには、儀式や人前で歌を披露するときなどに、タマサイを身につける者も現れてきている。さらには、これを新たに作る者も出てきており、タマサイの今後の展開が期待される。

第17章「タイの若者文化と土製ビーズ——流行と衰退が映す社会の変容」(中村真里絵)では、華やかさにも稀少性にも欠けるという土製ビーズに焦点が当てられる。もともと焼物産地として有名なタイ東北部では、1970年代後半に政府の弾圧を逃れて流入した学生活動家たちによって、土製ビーズが作り出された。村人にとって馴染みのないこのビーズは、1980年代のある映画と歌手のヒットを契機にタイ全土で流行した。本稿では、地味だが存在感のある土製ネックレスの流行には、輝かしい高度経済成長を続ける一方で、さまざまな社会問題を抱えていた当時のタイ社会の状況が反映されているのだと分析する。

第18章「日本で華開くビーズ文化——ガラスビーズ・ビーズバッグ・ビーズ織り」(池谷和信)は、現代日本における多様なビーズ利用の状況を紹介する。日本列島の本州では、奈良時代以降、仏具としての数珠の利用を除いてビーズ文化はほとんど発達しなかった。江戸時代にはアイヌとの交流によりガラス製トンボ玉がつくられるようになり、現代に至るまでさまざまなビーズ利用がある。昭和30年代には流行したビーズバッグ、ビーズ織りやワイヤービーズ、ペーパービーズなどが流行した。日本では、ビーズ空白期が長

かったからこそ、現在において世界各地と結びつきビーズが利用されているといえるのだろう。

以上、本書の内容を概観してきた。本書の際立った特徴は、その構成に示されるように、およそ10万年前から現在までという非常に長いスパンで、世界各地の地域や民族を射程に入れていることである。ホモ・サピエンスがビーズを使用し始めたときとされる時代の東アジアや日本列島、琉球から始まり(第I部)、次に古代日本、インダス文明、古代エジプト、古代中国といった古代国家や古代文明を対象とし(第II部)、大航海時代を迎えてのアフリカやアイヌ居住地域、オセアニアと世界との接続を論じ(第III部)、そして東アフリカ牧畜民、台湾原住民、アイヌ、タイと日本といった現在を生きる人々とビーズとの関係に迫る(第IV部)。また研究手法も多様であり、第I部と第II部では考古資料が、第III部では歴史資料と民族資料、第IV部では民族資料が主に使用される。

ビーズ素材には多様な物質が用いられている。人類最古のビーズは、穴のあいた貝殻やダチョウの卵殻だとされる(第1章)。古来、身近な自然環境から入手できる動物の骨や歯、石、貝、木の実や草木などがビーズとして使用され、その後ガラス、金属、焼き物などの人工物や、貴石の使用が広がる。石や貝も交易の対象となっていたが(第2章、第4章)、紀元前2500年ごろに登場したガラスビーズは、より広範に取引され、地球規模で地域と人々を結びつけるようになる(第5章、第10章、第11章、第12章)。また、ビーズがどのような交易ルートを通ったのかは、石、貝、ガラス、準貴石の加工方法、製作技法(第2章、第4章、第5章、第6章)の分布からも読み取ることができる。素材と流通に関する記述からは、ビーズとその使用の歴史の変遷が明らかになる。特にガラスビーズは、古来よりユーラシア大陸の東西を陸と海のルートを通じて結びつけたように、各地に強い影響をもたらす魅力を備えていたことが興味深い。

本書では、人がビーズにいかなる社会的な役割を付し、文化的な価値づけをおこなってきたのかも明らかにされる。ビーズには、交易品や贈答品、社会階層を示す威信財や財宝、信仰や儀礼の道具、他者との差別化やアイデンティティの表象としての役割や意味などが付されてきた。これらの役割や意味づけは決して一意的なものではなく、重なり合ったり、時代によって移り変わっていったりもする。ビーズは決して単方向の視点からとらえられるものではないことが理解でき

る。長いスパン、広い地域を対象としている本書の、ホモ・サピエンス史をビーズとの関係から構築する、という目的は達成されているといえるだろう。

しかし一方で、もうひとつの「ビーズを通して美の追求を考える」(p. 1)という目的が達成されたのかには疑問が残る。論考によっては、美に関して触れていないものもあり、この問題意識が本書全体を通じて共有されていたのかどうか不明瞭である。その要因は、本書が美をどのように定義するのかを明確に示していないことにある。

序論では、美に着目する理由について、「ビーズには美的魅力が存在し、それが集団内や集団間での価値の共有の求心力の一つとなり、社会ネットワークが形成された可能性を考えることができる」(p. 2)、「ビーズを身に着けることは、美を追求する行為としてみなされる。(中略)私たちは、ビーズを通して個々の民族が持つ美しさの感覚の違いをうかがい知ることができる」(p. 3)とある。ここから本書では、美とはビーズそのものに所与に備わるものであり、そのために人々がビーズを身に着けたり、交換をしたり、価値づけをしたりし、さらにはそれが時代や民族ごとに異なるものと想定されていることがうかがえる。

ただ、ビーズそのものに備わっている美とは決して普遍的なものではないだろう。美に対して著者たちの主観が見え隠れする箇所がある。第3章の「縄文時代のビーズの素材をみると、貝製、動物の骨歯製、植物の種実製、漆木屎製、焼成粘土製で、翡翠や琥珀以外はそれほど美しくなかったのではないかと筆者は感じる」(p. 62)、第17章の「タイの土製ビーズは石やガラスと比べて地味で見劣りがする」(pp. 269-270)などの記述からは、ビーズに所与に備わっているとされる美に、見る人によって優劣がつけられる可能性があることが示唆される。

それではなぜ本書は、ビーズの美に着目するのだろうか。それを布との比較から考えてみたい。布は、ビーズと同様に古来より世界各地で生産され、グロー

バルに交易し、社会の文脈に埋め込まれながら使用されてきた。ただし、布と比較すると、ビーズの素材である石や貝、ガラスなどは考古遺物として残りやすい。だからこそ本書の時代設定も可能となったといえる。もうひとつ、どちらも身につけるものだが、ビーズは身体保護という機能性よりも、装飾性に特化している点が特徴的である。生活上の必需品ではないのにも関わらず、古来より広範囲で使用されてきた。そこに人類の美意識が反映されてきたのだろう。

ビーズから示されるのは、物質的な美しさ以上に、目新しさや稀少性の高いものを美と結びつけてきた人類の軌跡ではないだろうか。ビーズの美とは決して所与のものではなく、人間の営みから創造されるものであることを、本書では数々の事例から実証しているのだが、それをより明確に示してほしいと思う。

本書を読んで改めて感じるのは、人類の装うこと、装飾することへの飽くなき探求心である。それに関して興味深く感じたのが、ビーズの受容や利用の程度の地域的差異である。先史琉球では文化圏ごとに貝ビーズ文化の発展の程度に差があったこと(第4章)、18世紀から19世紀以降のカメルーンにおいて、首長制社会ではビーズ文化が花開いたのに対し、イスラーム社会や狩猟採集民社会ではそうならなかったこと(第10章)、オセアニアにおいて、ヨーロッパから持ち込まれたガラスビーズが西部ミクロネシアでは高価値が付されたのに対し、ポリネシアではそうならなかったこと(第12章)などの事例は、ビーズの価値が決して普遍的ではないことを示している。壮大なスケールで人類とビーズの関係を描くことに成功している本書にもし続編があるのなら、ビーズの受容や利用の差を、美の追求の差異との関わりから横断的に考察してほしいと望む。

参考文献

池谷 和信(編)

2017 『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』国立民族学博物館。